大隈重信没後100年記念式典

大隈と福澤の交流を読み解く － 近代日本の政治と経済 －
経済政策共鳴者としての大隈と福澤

小室正紀

◇大隈重信(1838～1922)と福澤諭吉(1835～1901)：親密な二人

➢同世代で、似かよった学問経歴

➢『福澤諭吉書簡集』にみる親しさ

‣圧倒的な通数の多さ(40通)

‣打ち砕けた文体

‣「僕」という一人称（明治11年の2通)

‣頻繁な面会・面談

‣協力事業：官僚推薦、統計学・大蔵省統計課、横浜正金銀行、高島炭鉱…

◇大隈財政の概略

➢大隈大蔵卿　1873(明治6年)～1880(明治13年)・1881(明治14年)

➢積極的な近代商工業育成・民間事業者育成

➢紙幣主義：不換紙幣の発行による財政

➢西南戦争による財政支出(紙幣発行量)増大により

→明治11年以降インフレ（銀貨1円＝紙幣1.2～1.8円で乱変動)

◇通貨政策における協働（明治11年2月28日 & 3月3日の大隈宛書簡)

➢地方の有力者達を引率して大蔵省金庫を見学した礼

➢通貨についての考えを執筆することを伝える

➢そのために大蔵省の資料(書写)を借りる

➢『通貨論』を出すに当たり、大隈の内心を聞く

「必ず高案ある事ならんと雖ども、念のため申上げ候義、大凡の御腹稿仰聞かされ下されたし。大丈夫の押え処さえあれば、新聞も憚る所なく発兌の積もりに御座候」

⇒『通貨論』は、大隈との相談の上で出版

◇福澤の『通貨論』(明治11年)の主張

➢紙幣主義：紙幣は文明の通貨=大隈の紙幣主義支持

➢しかし、インフレに注意し慎重に発行量を調節

➢インフレで特に害をこうむる階層

「将に産を成し身代を増さんとする者」、

インフレは、「草木の春芽を剪てその発生を妨る」

⇒大隈の同意の元に出版＝大隈もインフレ対策の必要を考慮

◇大隈のインフレ対策案

➢明治11年「公債及び紙幣償還概算書」、明治12年「国債紙幣償却方法」

経済成長策を継続しながらの軟着陸型の紙幣整理案

➢明治13年 外債5000万円により、一気に不換紙幣を整理する案

＝貨幣流通量を減らさない案

しかし、政府内守旧派や松方正義らの反対により否決

明治14年10月　大隈失脚 → 松方正義が大蔵卿に

◇松方財政・松方デフレ

➢松方正義 1835～1924 年(大蔵卿・大臣 1881～1892 年)

➢極端な緊縮政策（増税と歳出削減）

➢不換紙幣を徐々に回収消却　＝貨幣流通量削減

➢その上で、円を銀貨との兌換紙幣に

⇒松方デフレ（非常に厳しい不況）：中農層や萌芽的企業の没落・破綻

◇福澤の松方財政批判（明治 23～25 年、特に～明治 20 年）

➢終始『時事新報』で松方の経済政策(貨幣流通量削減を行い不景気を放置)を批判

➢対案

▸5000 万円の国内外債により一気に紙幣を安定化

▸外債により大々的に鉄道建設（波及効果が大きい）

▸外債により市場に資金を供給する

▸日本経済の潜在的成長力からして外債は返済可能

＝下野した大隈に代わり、その積極経済政策を紙上で主張

◇「外債論」にみる経済政策観　（「外債論」明治 18 年 12 月 3-5/7/8 日）

➢松方デフレの中で経済は、「古来未曾有の衰退」「無職業の塗炭」

➢松方の経済政策を批判しつつ

「我輩の所見は聖人に異なり、天下一夫も仕事を得ざる者なからしむるに在るのみ。是ぞ経済最上の目的なれば、此目的をさへ達すれば他に求る所のものあるべからず。」

＝経済政策の最上の目的は完全雇用

◇松方に対する福澤の評価

➢明治 23 年の時点で松方財政を総括

「国中無数の家産を倒して、その成跡は国民中の貧に貧を重ね、富に富を加へて、貧富懸隔の悪風潮に一層の速力を與へた」、「経済の大義に戻るもの」

明治 23 年 5 月 29-31 日・6 月 2-4 日「財政始末」

➢明治 25 年松方内閣での蔵相兼任の伝聞に対して

「我輩は唯日本経済社会の利益の為めに飽くまでも大蔵大臣再任の説に反対するものなり」　明治 25 年 8 月 7 日「大蔵大臣再任の説に就て」

◇大隈の松方評

「大隈の説は内閣総代りに及ばず。但し松方の会計には我慢が出来ずと申て、是れには寺島その外にも同意者多し。」明治 20 年 9 月 21 日中上川彦次郎宛福澤書簡

◇大隈・福澤の共鳴

➢積極財政により、安定した雇用を生むような経済環境を提供し、萌芽しはじめた民間経済をできるだけ広範に成長させる

➢健全財政基盤の確立を第一とし、その上で官主導の経済育成を目指す松方と対立

◇おわりに

当時の後進国としての限られた条件の中で、民間経済とその主導性を育成するという点で、大隈と福澤は共鳴し協働していた

【主要参考文献】

『福澤諭吉書簡集』岩波書店、2001～2003年
『通貨論』(『福澤諭吉著作集』第6巻) 慶應義塾大学出版会、2003年
福澤の松方財政批判についての主な典拠
➢いずれも『時事新報』社説
➢年はいずれも明治
➢＊印は『福澤諭吉全集』未収録論説、それ以外は『福澤諭吉全集』
「紙幣引換を急ぐべし」16年6月16/19日
「外債を起こして急に紙幣を兌換にするの可否に付東京日々新聞の惑を解く」16年6月27-30日
「紙幣兌換遅疑するに及ばず」17年1月25/26日
＊「国内興すべき事業あり、これに供すべき労力はあれども、相伴ふべき資本金なし」17年2月16日
＊「外国債恐るゝに足らず」17年2月22日
＊「外国の資本を借来りて鉄道を興し以て内国の富源を深くすべし」17年2月28日
＊「大に鉄道を敷設するも商業顛滅の来る気遣ひなし」17年3月3日
＊「全国の不景気は人力を以て挽回を得べし」17年11月22日
＊「不景気救済策」18年6月17/18日
＊「金融逼迫」18年8月14/15日
「紙幣交換の為には外債も憚るに足らず」18年10月17/19-21日
「外債論」18年12月3-5/7/8日
＊「年既に窮し民亦窮す」18年12月31日
「財政始末」23年5月29-31日・6月2-4日
「大蔵大臣再任の説に就て」25年8月7日